

1. 研究の目的及び背景

本研究では横須賀市の地形構造に着目し、横須賀市の景観構造の把握を試みる。横須賀市は、海岸地形、谷地形など、平面、断面的に富んだ地形構造をしている。本研究では、地形構造に着目し、横須賀市に関する空間モデルの構築を行うことにする。空間モデル構築の目的として、都市景観の骨格となる物の基礎として、地形が挙げられ、又、地域の景観的な特徴はその地理的条件に大きく依存すると考えた。すなわち地形的特長が類似している地域に関しては、ある共通の景観的特徴が存在すると考えた。その導き出したモデルに対しての、視覚的特長、歴史的な変遷を抑え、アンケート調査を行い地域の共有した景観構造を把握する。

2. 横須賀市の地形構造

明治 16 (1883) 年頃の、横須賀市の特徴として、横須賀の大部分を構成する丘陵地は大楠山 (標高 241m) を最高点とし、およそ 50 ~ 150m の高度を持つ。東側の海岸線の特徴として、それぞれの海岸線に大小様々な湾、浜状の海岸線が形成されている。西側の海岸に関しては小さな単位で、磯と浜が連続しているが、その中に太田和湾の比較的大きな湾が特徴的である。内陸部に関しては、横浜市南部から連続する、比較的なだらかな丘陵部と、小原台と武山南方に分布する台地と、それらに刻まれる低地が特徴である。また、谷状の大小様々な地形の入組みが、横須賀の地形構造を大きく特徴づけている。近年、東京湾に面する海岸線のほとんどが大規模な埋立て事業により、大きく様変わりしている。内陸部に関しても、標高 50m から 100m 程度の丘陵地においては、戦後、大規模な宅地造成により、小さな谷筋が埋められ、丘陵尾根が切り取られている (図 1・2 参照)。



3. 空間モデルの構築

前項のことを踏まえて、横須賀市海岸部の特徴から、磯浜モデル (丘陵迫り型) 磯浜モデル (丘陵離れ型)、岬モデル、浦モデルの 4 モデル。内陸部からは 谷戸モデル、谷モデル、丘陵モデルの 3 モデルを導き出した (図表 1 参照)。

図表-1 横須賀市における空間的特長

図-1 地形構造に見られる横須賀市の空間的特徴

	磯浜モデル (丘陵迫り型)	磯浜モデル (丘陵離れ型)	岬モデル	浦モデル	谷戸モデル	谷モデル	丘陵モデル
空間モデル模式図							
モデルの主な分布域	米ヶ浜～馬堀町 佐島～秋谷	長瀬～久里浜 野比～津久井 御幸浜	箱崎 泊町 (吾妻崎) 走水～鴨居 (観音崎) 西浦賀町～長瀬 (千代崎) 久里浜～野比 (千駄ヶ崎) 長井 (荒崎) 佐島	船越～田浦港町 田浦港町～楠ヶ浦 東浦賀町～西浦賀町	船越町～東逸見町 (内陸部) 須軽谷 池上～平作 池田町	衣笠～久里浜 大矢部 大津町～根岸町 馬堀町～浦賀町 佐原～野比 長沢	他の 6 項目に該当していない地区を主に、丘陵モデルとした。

キーワード 景観構造 地形 景観モデル

連絡先：横浜市金沢区六浦東 1 丁目 50-1 関東学院大学工学部土木工学科

4. 空間モデルの特徴とその変遷

空間モデルを作成した後、各モデルに対して、共通したモデルの主な分布域、景観の特徴横須賀市における市街化の特徴を示した(図-2・3参照)。

5. アンケート調査

各空間モデルを作成した後、本研究では、浦モデル、谷戸モデルに該当する地区に対してアンケート調査を行った。浦モデルに対しては、写真11枚を使用し、SD法に基づき各1枚の写真につき15形容詞対を用いた。本研究では、地域住民の

空間に対する認識を明らかにするため、横須賀市外に住む学生15名と住民19名を被験者として行った。

例えば、写真1に関しては、全体的に「特長のある感じ」、「複雑な感じ」、「騒々しい感じ」、「立体的な感じ」、「緑の少ない感じ」、「目立つ感じ」といった特性を示している。地域住民に関しては、「特徴のある感じ」、「複雑な感じ」、「立体的な感じ」、「緑の少ない感じ」、「目立つ感じ」といった特性を示している。一方、学生に関しては、「つまらない感じ」、「古い感じ」、「落ち着きのない感じ」、「複雑な感じ」、「騒々しい感じ」、「立体的な感じ」、「緑の少ない感じ」、「親しみのない感じ」、「いらだつ感じ」といった特性を示している(図-4参照)。

地域住民および学生を比較すると、「つまらない-楽しい」、「落ち着きのない-落ち着きのある」、「親しみのある-親しみのない」、「いらだつ-心やすらく」においては、平均値の差が1以上の差が見られる。

特に学生においては、「いらだつ感じ」、「親しみのない感じ」と示しているのに対し、住民においては、「心やすらく感じ」、「親しみのある感じ」と相反する指標を示している。このことから、住民において、クレーンという構造物の存在は、時間などの経緯により、日常景として浸透し、地域を認識する代表した景観要素として存在していることが伺える。

5. まとめ、及び今後の課題

本研究では、横須賀市の地形的特長をモデル化することで、共通する景観的特徴と把握し、またアンケート調査を行うことにより、地域で共有される景観的要素を導き出すことができた。この結果は、今後の景観のあり方を考える際、その場所が持っている、本来的な景観の構造に根ざした景観施策を考える有用な手がかりの一つとして考えられる。

今後の課題として、アンケート分析に関して、因子分析など、深く考察し分析を進めていく予定である。

謝辞

本研究を進めるにあたり、(株)プランニングネットワーク、および横須賀市の皆様にご指導、御協力を頂きました。ここに感謝の意を述べます。

(注1) 2001年5月撮影(撮影者(株)プランニングネットワーク)

参考文献：横須賀市(1988)横須賀市史 横須賀市、財団法人地方自治研究機構(2002)眺望景観調査検討業務 報告書

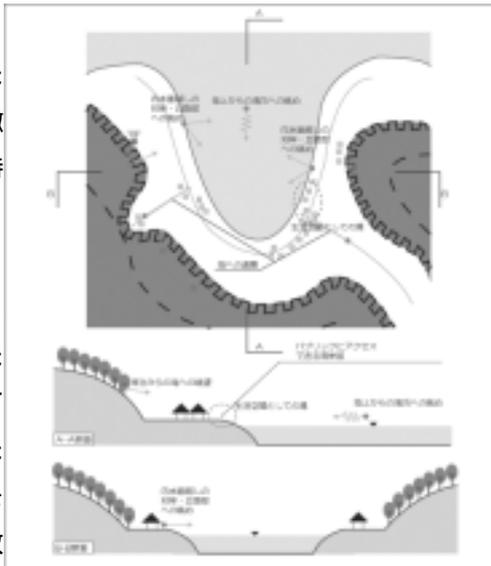


図-2 浦モデルの空間的特徴

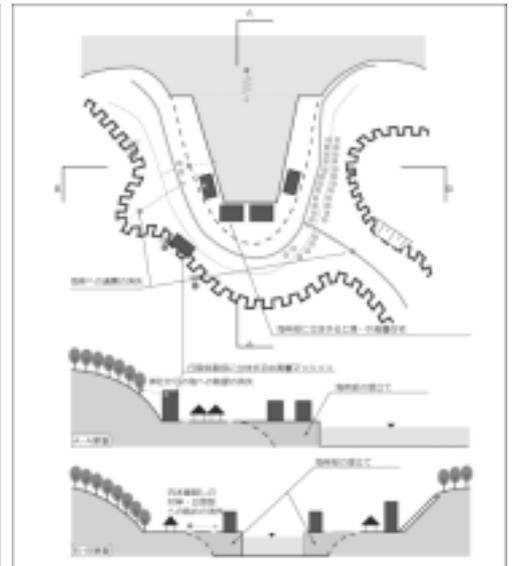


図-3 浦モデルの変遷とその認識



写真1 注1

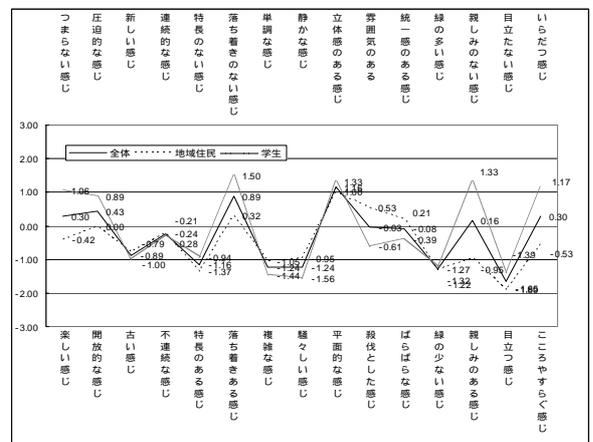


図-4 写真1による学生、住民間の認識相違